様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：８２６７４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５３０７７９

研究課題名（和文）高齢者施設の看取りケアにおける実践知の生成と蓄積に関する研究

研究課題名（英文）Developing practical knowledge of end-of-life care in nursing homes

研究代表者
島田　千穂（Shimada, Chiho）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究副部長

研究者番号：３０３８３１１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：　看取りケアは、改善を目標にできないため評価が難しい。さらに、高齢者本人と家族との多様な価値観を考慮して提供することが求められる。本研究は、看取りケア経験を他者と照合させながら振り返る反照的習熟プログラムが、看取りを理解するプロセスに与える影響を確認することを目的とした。
その結果、他者との経験の照合による看取り概念の形成プロセスは、内省の深化と事例からの普遍化を伴って生じ、経験学習サイクルで説明しうること、看取りケア遂行意欲は、他者との対話による経験の言語化と課題の自覚化に伴い、向上する可能性が示された。看取れる実践者の育成には、他者との経験の照合による内省促進が有効である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Because of the nature of end-of-life (EOL) care process in which elderly patients, their families, and physicians are involved with different ideas about life and death, it is difficult to define a single criterion for “good” EOL care. The concept of reflection originated with Dewey was used as a key of EOL care improvement. In addition to this key concept, the mutual validation step was thought to be essential. We developed Collaborative Reflection Program, in which participants review and learn from their end-of-life care experiences together. The participants, who were working as care workers and nurses in nursing homes, became confident of EOL care through the experiential learning cycle. The multi-institutional Program can be motivated to engage in EOL caregiving with confidence. The results suggest that collaborative reflection is efficient in order to maintain care professionals’ motivation for providing and improving EOL care.

研究分野：終末期ケア

キーワード：終末期ケア　高齢者　施設ケア　リフレクション　経験学習

１．研究開始当初の背景

１）看取りケアにおける実践上の困難

福祉施設の看取りケアの方針や内容は、本人、家族、医療者、施設職員等、関係者間の合意で決定している。施設が用いうる資源（人、場所、医療など）を使って、その人の望む（と推測される）生活を最期まで提供することをめざしてケアを行う。したがって、何が「正しい」ケアなのかは利用者ごとに異なり、それを探索しながらケアを提供することになる。先の状態予測が難しく、最終的には死がくることを前提にしながらのケアは不安が大きく、達成目標が不明確で援助の意義が実感できないケア提供者も少なくない。

一方、看取りケア経験者の中には、最期を見送るまでに様々な困難があっても、それに取り組むことにやりがいを感じる人も多い。単に経験年数や年齢の差異だけでなく、看取りケア経験から専門的な知識・技術が生成でき、自分なりに蓄積して、次の看取りケアに生かせるかどうかによって、看取りケアのとらえ方が異なると考えられる。

２）振り返りをシステム化させた「反照的習熟プログラム」

先駆的に看取りケアを実施していた施設では、経験からの学びを重視し、看取り事例の「振り返り」に取り組んできた（櫻井 2009）。実践現場における振り返り（Reflection）は、経験を知識に変換して蓄積し、専門家としての成長に貢献できる手法として理論化されている（Shoen:1983,1987、Burns:2000、Johns:2004）。筆者は、職員個々の振り返りをさらに発展させ、看取りケア体制構築のための知識として蓄積することをめざした「反照的習熟プログラム」を開発して試験的に施設に導入し、影響を評価しているところである。本研究は、このプログラムを導入する施設を本格的に拡大し、その効果の検証を進めるとともに、施設で生成・蓄積した実践知を、異なる施設の実践知と反照させるプロセスを加え、成果を評価することを目的とする。「反照的習熟プログラム」は、①看取り終了後、「看取りケア確認シート」への記入を通した『内省の促進』の段階、②「検討会」を通した職員間での『反照と共有』の段階を循環させることによって、看取りケア実践知の生成と組織的蓄積を促進するものである。

「看取りケア確認シート」は、職員によるケアの自己評価項目として Munn らの QOD-LTC：Quality of Dying in Long Term Care、Kiely らの SWC-EOLD：Satisfaction With the Terminal Care in End of Life in Dementia と、昨年度実施した特別養護老人ホームの看取りケアの訪問調査で抽出した課題を参考にして作成した。現在、研究協力施設で試験的に導入しており、内省を促進する項目としての妥当性を検証中である。

２．研究の目的

関係者間の合意に基づいてケア方針や内容が決定される看取りケアは個別性が高く、個別事例の経験を、共有できる知識や技術として生成、蓄積し、ケアの質向上に生かす仕組みが必要とされている。本研究は、ケアを担う専門職個人の内省としての事例の振り返りと、組織内の専門職間の経験の共有（反照）を組み合わせた「反照的習熟プログラム」の導入が、プログラム参加者にどう影響するか、確認することを本研究の目的とする。

３．研究の方法

１）単一施設「反照的習熟プログラム」の影響評価

反照的習熟プログラムを導入した施設職員が、検討会終了後のフィードバック票に記入した自由記述の内容を分析し、看取りケアの認識に与えた影響を質的に分析した。

２）多施設「反照的習熟プログラム」の影響評価

反照的習熟プログラムへの参加者の看取りケア遂行能力が、プログラム参加の前後で変化するかどうかを分析した。看取りケア遂行能力自己評価は、木村の能力向上尺度（2013）を参考にケア場面に適した表現に書き換えて研究者らが作成したものである。

４．研究成果

１）参加施設

研究期間中、参加施設は 24 施設、92 事例についてのべ 1,385 名の職員が参加した。

２）単一施設「反照的習熟プログラム」の影響

検討会後のフィードバック票自由記述の内容を質的に分析したところ、参加者が看取りの認識の変化を自覚していることが明らかとなった。その内容は、具体的経験が言語化でき他者の経験と照合されたことによって、自分では経験できなかった点を知り（経験の補完）、自らの見方・考え方の特徴に改めて気づき、実施したケア内容の評価について相互に点検する機会になっていた（内省の深化）。また、看取りケアの振り返りが、現在の入居者のケアの改善を動機づけ、看取りとは何かを客観的な視点で獲得することにつながり、組織的な課題を浮上させた（事例からの普遍化）。これらの影響は参加者によって多様であり、形成された内省の場によっても異なる可能性が示唆された。

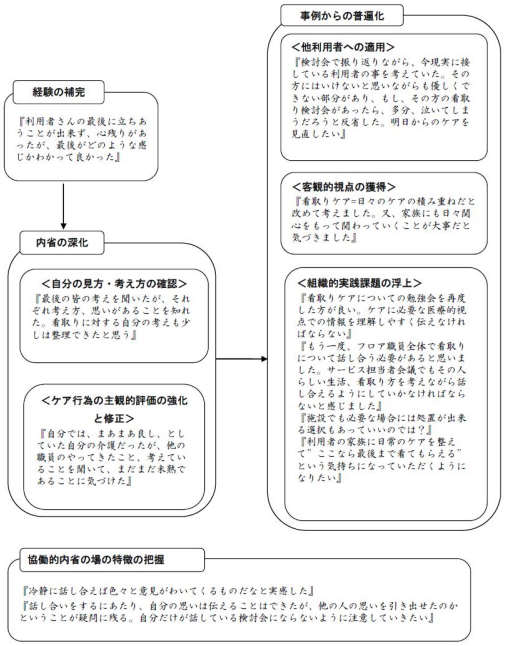

図　反照的習熟プログラムの影響

３）多施設「反照的習熟プログラム」の影響

関東 1 都 6 県の全特別養護老人ホーム 1,777 か所から参加希望者を募集した。その中から特別養護老人ホーム 42 か所の介護職 71 名、看護職 35 名が、16 グループに分かれてセッションに参加した。グループは、職種、年齢、性別を多様にし、相互作用を生じさせやすくした。

セッションでは、自施設の看取りケア事例紹介後、肯定的なフィードバックとケア内容に関する情報交換を通じた内省の機会を提供した。

セッション終了直後に、看取りケアに関する認識への影響、及び内省促進の程度を評価した。また、アウトカム評価として、セッション１か月前後で業務遂行能力自己評価得点を比較した。看取りケアに関する認識への影響については、看取りケアの考え方や不安の共通性、自施設の看取りケアの改善点、看取りケア理念の強化について９割が肯定的に評価した。また業務遂行能力自己評価得点（最小 6 最大 30）の平均値はセッション前 21.4±2.9、セッション後 22.3±3.6 で、有意な上昇がみられた（t=-2.854、p=.005）。看取りケア経験の照合を通じた内省は、自らのケア業務遂行への認識を肯定的な方向に自覚化させた可能性が考えられる。

また、セッション当日の内省評価において、言語化が促進された、課題が自覚化できたと評価した人ほどケア遂行能力自己評価得点が上昇していた。セッションの作用の内、経験の言語化と課題の自覚化が特に、ケア改善意欲を高める方向に作用した可能性が考えられる。今後の検討課題が焦点化された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　14　件）

1. 島田千穂、石﨑達郎、高橋龍太郎：臨死期におけるケアの場の移行を回避する看取りケア体制の関連要因．厚生の指標 63（4），1-7，2016（査読有）
2. 島田千穂：介護の世界；自分の視点・ひとの視点．介護人材 Q&A3 月号 12(137)，76-77，2016（査読無）
3. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；何が良い看取りと言えるのですか．CARE WORK3 月号，12-13，2016（査読無）
4. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；独りで逝かせたくないんです．CARE WORK1 月号，12-13，2016（査読無）
5. 島田千穂、伊東美緒、平山亮、高橋龍太郎：看取りケア経験の協働的内省が特別養護老人ホーム職員の認識に及ぼす影響．社会福祉学 56（１），87-100，2015（査読有）
6. 島田千穂、中里和弘、荒井和子、会田薫子、清水哲郎、鶴若麻理、石崎達郎、高橋龍太郎：終末期医療に関する事前の希望伝達の実態とその背景．日本老年医学会誌 52（１），79-85，2015（査読有）
7. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；看取りケアはどのように学ぶのがよいのでしょうか．CARE WORK11 月号，12-13，2015（査読無）
8. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；看取りはいつから始まるのですか．CARE WORK９月号，12-13，2015（査読無）
9. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；何もできず、最期をただ待っているだけのようでつらいのです．CARE WORK７月号，12-13，2015（査読無）
10. Shimada, C., Hirayama, R., Nakazato, K., Arai, K., Ishizaki, T., Aita, K., Shimizu, T., Inamatsu, T., Takahashi, R. : What has become more acceptable? Continuity and changes in older adults' attitudes toward end-of-life care in Japan. Geriatrics and Gerontology International, 15(7), 927-930, 2015（査読有）
11. 島田千穂：人生の最期を支えるケア；なぜ介護職が看取りに関わらなければならないのですか．CARE WORK5 月号，12-13，2015（査読無）
12. 島田千穂：介護の世界；自分の視点・ひとの視点．介護人材 Q&A4 月号 12(126)，58-59，2015（査読無）
13. 島田千穂、堀内ふき、鶴若麻理、高橋龍太郎 ： 特別養護老人ホームにおける看取りケア実施状況と関連要因．老年社会科学，34(4)，500-509，2013（査読有）

14. 島田千穂、高橋龍太郎 ：高齢者介護施設における看取りの実態と課題．Geriatric Medicine, 50(12), 1419-1422, 2012（査読無）

〔学会発表〕（計 26 件）

1. 島田千穂、伊東美緒、原沢優子、樋口京子：特別養護老人ホームの看取りケアに関わる看護職の役割；他施設の介護職とのグループ討論での語りから．第 35 回日本看護科学学会学術集会，広島国際会議場（広島県広島市），2015.12.5-6
2. 島田千穂：協働的内省セッションによる看取りケア遂行・改善意欲の向上．第 22 回ヘルスリサーチフォーラム，千代田放送会館（東京都千代田区），2015.11.28
3. 島田千穂：人生の最期を支える看取りケアの実践と課題-本人の希望を中心にしたケアの実現に向けて-．新潟青陵学会第 8 回学術集会，新潟青陵大学（新潟県新潟市），2015.11.7
4. Shimada, C., Hirayama, R., Ito, M., Nakazato, K., Ishizaki, T., Takahashi, R.：.Psychosocial Deterrents to Older Adults' Expressing Their Wishes About End-of-Life Care in Japan. The 10th IAGG-Asia 2015 Congress, Chiang Mai（Thailand）, 2015.10.19-22
5. 島田千穂：ライフデザインノートの使い方．第 20 回板橋区医師会医学会区民公開講座指定発言，板橋文化会館（東京都板橋区），2015.9.13
6. 平山亮、涌井智子、島田千穂、原沢優子：看取りにおける「家族」とは何か；介護職・看護職の語りから．第 25 回日本家族社会学会大会，追手門学院大学（大阪府茨木市），2015.9.5-6
7. 中里和弘、島田千穂、舞鶴史絵、野田京、石崎達郎、佐藤眞一、高橋龍太郎：訪問看護事業所における遺族支援の現状と認識－支援の実施状況、意義と有用性に関連する要素について－.日本老年社会科学会第 57 回大会,パシフィコ横浜（神奈川県横浜市），2015.6.12-14
8. 島田千穂：終末期医療における多職種連携；本人の希望は何か．第 29 回日本老年学会合同シンポジウム，パシフィコ横浜（神奈川県横浜市），2015.6.12-14
9. 島田千穂、中里和弘、伊東美緒、高橋龍太郎：特別養護老人ホームにおける死亡診断体制の実態と看取りケアとの関連．第 57 回日本老年医学会学術集会，パシフィコ横浜（神奈川県横浜市），2015.6.12-14
10. Shimada, C., Hirayama, R., Higuchi, K., Harasawa, Y., Ito, M., Nakazato, K., Ishizaki, T., Takahashi, R.: Reviewing Care Experiences Together: The Influence of Collaborative Reflection on Nursing Home Staff's Self-Rated Competence as Care Practitioner. International Association of Gerontology and Geriatrics European Region 8th Congress, Dublin (Ireland). 2015.4.23-26
11. Takahashi, R., Shimada, C. : Supporting elder's decision-making: from practical perspective. Symposium on decision-making and elderly care, Hallym University Institute of Aging, Chuncheon(Korea), 2015.1.14
12. Shimada, C., Hirayama, R, Ito, M., Nakazato, K., and Takahashi,R. : The influence of collaborative reflection on nursing home staff members' views on end-of-life care. 21st International Congress on Palliative Care, Montreal (Canada), 2014.9.9-12
13. 島田千穂：人生を振り返り記述する作業を通じて終末期医療の希望を書き残す『ライフデザインノート』の開発～実践的介入研究からの示唆～．東京大学大学院人文社会系研究科　臨床死生学・倫理学研究会， 東京大学（東京都文京区），2014.7.2
14. 島田千穂、中里和弘、石崎達郎、会田薫子、鶴若麻理、清水哲郎、荒井和子、稲松孝思、高橋龍太郎 ：終末期医療の希望の明確化が家族への伝達意識に与える影響．第 56 回日本老年医学会学術集会，福岡国際会議場（福岡県福岡市），2014.6.12-14
15. Shimada, C., Hirayama, R., Nakazato, K., and Takahashi,R. : What Motivates Japanese Older Adults to Communicate Their Preferences Regarding End of Life Care? , 10th International Conference for Clinical ethics Consultation, Paris (France), 2014.4.24-26
16. 島田千穂、堀内ふき、伊東美緒、高橋龍太郎 ：看取りを行う特別養護老人ホーム看護職の専門性の認識と仕事有能感との関連；他職種との比較から．第 33 回日本看護科学会学術集会，大阪国際会議場（大阪府大阪市），2013.12.6-7
17. 島田千穂 ：施設での看取りから学ぶ、自分らしい最期とは．カシオペア市民フォーラム，二戸地域振興センター（岩手県二戸市），2013.9.22
18. Shimada, C., Hirayama, R., Ito, M., and Takahashi R. : The influences of collaborative reflection on nursing home staff members' view of end of life care. The 17th International Reflective Practice Conference, Swansea (UK), 2013.9.9-11
19. Shimada, C., Horiuchi, F., Hirayama, R., and Takahashi R. : The Relation

between Perceived Quality of End of Life Care and Reflections on the Care Experiences among Nursing Home Staff Members. The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, Seoul (korea), 2013.6.23-27

20. 島田千穂、荒井和子、中里和弘、会田薫子、鶴若麻理、稲松孝思、松下哲、石崎達郎、高橋龍太郎 ： 高齢患者の終末期医療に対する意識の変化．第 55 回日本老年医学会学術集会，大阪国際会議場，2013.6.4-6
21. 中里和弘、島田千穂、荒井和子、会田薫子、鶴若麻理、稲松孝思、松下哲、石崎達郎、高橋龍太郎 ： 高齢者の終末期医療の希望と死生観との関連．第 55 回日本老年社会科学会大会，大阪国際会議場（大阪府大阪市），2013.6.4-6
22. 島田千穂、堀内ふき、高橋龍太郎 ： 特別養護老人ホーム職員による看取りケア実践（特定課題セッションⅠ）．日本社会福祉学会第 60 回秋季大会，関西学院大学（兵庫県西宮市），2012.10.20-21
23. 島田千穂、会田薫子、鶴若麻理、荒井和子、石崎達郎、高橋龍太郎 ： 高齢者終末期医療における胃ろうに対する意識（要望演題 A：胃ろうを考える）．第 17 回板橋区医師会医学会，板橋文化会館（東京都板橋区），2012.9.29
24. 島田千穂 ： 介護施設の“終活”（シンポジウム：私たちの“終活”）．NPO 法人在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク第 18 回全国の集い in 高知 2012，高知市文化プラザかるぽーと（高知県高知市），2012.9.16-17
25. 島田千穂、堀内ふき、高橋龍太郎 ： 特別養護老人ホームのケア環境の評価に関する研究．第 54 回日本老年社会科学会大会，佐久大学（長野県佐久市），2012.6.9-10
26. Shimada, C., Horiuchi, F. and Takahashi R. : Factors associated with quality of the end-of-life care perceived by formal care providers. 19th International Congress on Palliative Care, Montreal (Canada), 2011.10.9-12

〔図書〕（計　3　件）

1. 島田千穂、伊東美緒：認知症・超高齢者の看取りケア実践，日総研出版，2016（141 ページ）
2. 島田千穂、伊東美緒、平山亮、原沢優子、樋口京子：看取りの振り返りを有効に実施するためのガイド；反照的習熟プログラムのすすめ．東京都健康長寿医療センター研究所，2016（37 ページ）
3. 島田千穂：特別養護老人ホーム看取りケア提供体制実態調査結果報告，東京都健康長寿医療センター研究所，2014（4 ページ）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.tmghig.jp/J_TMIG/kenkyu/team/syumatsuki_care.html
（島田千穂、伊東美緒、平山亮、原沢優子、樋口京子「看取りの振り返りを有効に実施するためのガイド；反照的習熟プログラムのすすめ」及びプログラムで用いる書式がダウンロードできます。）

６．研究組織
(1)研究代表者
島田　千穂　（SHIMADA, Chiho）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究副部長
研究者番号：30383110

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
高橋　龍太郎　（TAKAHASHI, Ryutaro）
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：20150881